

艦これの世界でエヴァになる

whiteカプチャーノ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

そのままの意味で主人公が艦これの世界でエヴァになるお話

- ・ 作者に文才は無いです、無いどこか地にめり込んでます
- ・ 思いつきと妄想と自己満で書いてます

## 目次

第一話	艦これの世界でエヴァになる	1
第二話	艦娘たちを助けるぞ!!	5
第三話	艦娘たちと友達になる	11
第四話	横須賀へGO!!	15
第五話	兄弟	19
第六話	金が欲しい	22
第七話	普段静かな奴こそ怒らせたら怖い	25
第八話	紫の巨人	29
第九話	使徒、襲来。	32
第十話	知らない世界、知らない空	36

## 第一話 艦これの世界でエヴァになる

かつし『誰か!... おーい!』

気が付くと俺はどこかの床に寝ていた、今何処に居るか確認しようにも

周りを見渡しても真っ黒い空間が続くだけ、なんやここ...

かつし『クソツツ!新しいアニメが!』

幸いなことに腕時計は無事だったんで確認したらもう午後8:12だった

... 確か、始まるのは8:00からだったはず... 終わった、俺の人生...:

神 『おーい、早速じゃが転生してもらおうゾ☆』

かつし『ええー!?マジで!?!』

神 『マジマジ、大マジじゃ』

かつし『ありがとうございます!!』

ついノリで快諾してしまった... まあいいか!でも何で俺を...?

神 『お前の日頃の行いがいいからじゃぞ』

うおおお!マジか!常日頃筋トレしてて良かったあ!

神 『では、早速どんなとk『艦これの世界でエヴァになりたい

!!』

神 『OK!!じゃあ行ってきな!』

ジジイがそう言う俺の周りは光に包まれていった.....

|||||||

|||||||

|||

エヴァ「... ってことでエヴァになったぞ!!」

見事にエヴァになったんだが..... これすげえな!!

よくよく調べるとこのエヴァ外装は俺の好きな初号機だし、海泳げるし

空飛べるし、覚醒の時見たいにビーム出せるし、何より制限時間が無い!!

しかも普通に喋れる!!さらに右肩のアレの所には俺を補助してくれる

ネルフの制服をきた妖精さんがいる!!…… まあその代償に右肩のアレは

完全に妖精さんの居住区になったんだけどな

妖精さん「…… ところであなたの名前はなんですか？」

…… アツ、まだ一言も喋って無かった、ええと……

エヴァ「かつしだよ」

妖精さん「じゃあ、かつちゃんでもいいですね!」

エヴァ「いいよくじゃあきみは補助妖精でホヨちゃんだね!!」

ホヨちゃん「あ： ありがとう」

…… お? 案外ノリがいいなこの子

エヴァ「ところでこのあたりに艦娘はいないか？」

あとは、艦娘と人間と仲良くなることだな!!

ホヨちゃん「ちよつとまっつけてくださいね…… いました!こ

こから北に400 km!

深海棲艦と戦っているようです!!」

エヴァ「何!?!今すぐ助けにいくぞ!!」

ホヨちゃん「はい!」

エヴァ「普通に言ったら遅くなるな…… ホヨちゃん!!飛んで

いくから掴まってるよ!!」

ホヨちゃん「はあい!!」

手が届くのに沈めてしまっただけは目覚めも悪いし何より悲しいからな

前世ではゲームではあるが艦娘を一人沈めてしまったしな…… 早くしないと!

ホヨちゃん「あ!あそこです!」

そう言ってホヨちゃんがさし示した方を見ると黒い塊と白い点々が主砲撃って



北上「嘘…」

大井「なにこれ…」

皆、動揺するのも当たり前だ、なぜなら…

陸奥「…………… 巨人？」

そう、私たちの目の前には紫と緑の巨人が立っていた…

## 第二話 艦娘たちを助けるぞ!!

艦娘―長門視点―

「なんだ…これは…」

つい先ほど深海棲艦からの奇襲を受け諦めかけていた時だった、突然空から『何か』が降ってきて激しい衝撃を起こした

その『何か』を確認するため先程の衝撃でよろめいた体を起こした

「巨人?」

深海棲艦かと思っていたが違った、目の前に居たのは全体的に紫色で

所々が緑色のロボットのような巨人だった

エヴァ「待っている」

そう巨人は言い残して深海棲艦の大群に突っ込んで行き

艦娘以外の攻撃では沈まないはずの深海棲艦を素手で

次々と沈めている

赤城「待っていて大丈夫なんでしょうか…」

目の前の光景を飲み込めずにいると横から赤城と加賀が巨人を見ながら

話しかけてきた

「正直私も逃げ出したいが、どうにかして友好関係を

築いて協力を頼めないかと思ってな」

加賀「友好関係?」

「そうだ」

気の所為かも知れないが、私達を守ってるようだ

なんとかして協力を頼めるかもしれない

なぜなら今、日本はかなり消耗してきている。制海権はこちらがかなり持っているが

取り返されるのも時間の問題なのだ

大和「ああっ!」

大和の叫び声が聞こえ大和の視線の先ではあの巨人の上半身が爆炎で包まれていた、どうやら巨人が突撃してきたことで混乱していた姫級たちが冷静を取り戻し反撃している  
北上「大丈夫かな…」

大井「あの爆発で生きてるのでしようか」

「分かんらん」

爆炎が晴れ、『死んでいるかもしれない』と思ったがあの巨人には傷一つ付いてなかった

加賀「…無傷？」

深海棲艦の攻撃は避けられない限り無傷なんてことはない、よもや防  
御行為を

していなければ大破の可能性すらある

大和「危ない!!」

大和が指差した方向を見ると深海棲艦が巨人を無視し私達に砲撃してきていた

避けようとしても燃料が無いので動けない

「ここで終わりか…」

「ギイイーン!」

「え？」

死を覚悟し目を閉じようとした時だった私達の前に巨人が立っ  
ていた

しかも虹色の八角形のようなもので攻撃を防いでいた

大井「バリア？」

「そんなわけが…」

と言っではいるが目の前の光景を見せられたら肯定するしかない  
い

というか私たちの艦装もバリアのような物なのだが…

深海棲艦の攻撃を防ぎ切った巨人は口からビーム(?)を出して  
一人残らず深海棲艦を沈めていった

赤城「終わった…」

「ああ…」





ださないうってあっちゃん言ってたよ！」

「あっちゃん？」

ホヨちゃん「あの巨人の名前だよ」

加賀「なんの話？」

と加賀の方を見ると先程の騒ぎの所為か皆起きていた  
ホヨちゃん「皆起きたね・・・おい!!あっちゃん!!  
皆起きたよー!!」

エヴァ「ほーい!!」

ドスドスドス・・・

エヴァ「皆起きたかー良かったー大丈夫？」

大井「だ・大丈夫ですけど・・・」

エヴァ「まあ皆だけで話したいこともあるだろうし  
俺達があっちで待つてるから」

そう言い残して巨人、もといあっちゃんは向こう側に  
歩いて行った

赤城「信用できるでしょうか・・・」

北上「助けてくれたし大丈夫でしょー」

大井「でも北上さん、油断させておいて・・・  
なんてこともあるかもしれません」

大和「でも妖精さんが従っていました」

加賀「確かに、大丈夫そうね」

妖精さんは基本艦娘や心が綺麗な人間にしか従わない  
しかも名前で呼び合う仲だ信用はできる

「名前はあっちゃんらしい・・・」

赤城「可愛い名前ですね」

北上「見た目は怖いけどねー」

「とりあえず信用はできる、行ってみよう」

大井「大丈夫かなー」

加賀「大丈夫でしょう妖精さんもいましたし」

そうして私達はあっちゃんという巨人が待っているところへ歩  
き出した

### 第三話 艦娘たちと友達になる

—エヴァア視点—

俺がいると艦娘たちだけで話せないだろうから  
ゆっくり話せるようにここで待つてるとだけ言い残して  
来た・・・アレは俺に惚れただろw

ホヨちゃん「は？何自惚れてるんですかねえ・・・」

「童貞だから仕方ないだろ!!」

・・・というか何で心を読めてんだ!!おかしいだろ!

ホヨちゃん「wどwうwてwいw」

「だあああ!うるさい!

童貞で何が悪い!童貞も守れん奴に何が守れる!」

ホヨちゃん「ごめんごめん(笑) そういうえば、前世は何してたの

？」

あ、ホヨちゃんは俺が転生して来たこと知ってるんだった  
な

「前世・・・」

|| || || ||

『こっちくんなよ!』

『何アレくキモいっうわっ!こっち見た、吐きそ〜』

『友達?お前と?なるわけねえだろwww』

『お前さーもう学校来るなよー目障りなんだよ』

『お前に弁当なんか必要ねえだろww』

『君の所為で風紀が乱れています、後で職員室に来なさい』

『君は、退学だ』

|| || || ||

・・・ごめん、言いたくない」

ホヨちゃん「あっ・・・ごめん・・・」

「大丈夫!大丈夫!ホヨちゃんは悪くない!」

ホヨちゃんには申し訳ないが、もうあの記憶は忘れてしまいたい  
もうあんな思いはしたくない・・・

長門「あの・・・聞こえているか？」

と長門が背伸びをしながら話しかけてきた

・・・長門よお前背伸びするようなキャラじゃないだろう・・・

「・・・背伸びしなくても大丈夫だぞ？お前達との

会話は無線みたいなものだから」

長門「・・・そ、そうなのか!？」アセアセ

おお、いつも武人氣質の

長門が焦る場面を見られるとはありがたやありがたや

長門「・・・コホン　そ、それでだなその・・・」

「ん？どうした」

何か恥ずかしそうだな・・・まさかトイレか!?

ホヨちゃん「うわぁ・・・」ジトオ・・・

ホヨちゃんから軽蔑の目を向けられてるが気にしない

世の中気にしない事も大切だ

加賀「あっちゃんさん・・・でしたか」

「さん付けしなくてもいいんだよ・・・」

何故さん付けをするのか？

加賀「ですが・・・」

大和「あっちゃんと言うのは呼びにくくですわね」

「確かに、会ったばかりだもんな・・・」

これは俺の所為か？エヴァになにか落ち度でも？

ホヨちゃん「落ち度しか無いんだよなあ」

「じゃあエヴァと呼んでくだせえ」キリッ

艦娘「「エヴァ・・・?」「」

『「エヴァンゲリオン」の略さ』

長門「・・・そ、そうか・・・それでエヴァ、その」

「何だ?」

長門「私達をだな?ここの横須賀鎮守府まで送って欲しいのだ

が・・・」

と長門が地図に指差しながら話しかけてきた  
「えっ?」

なんでや! 艦装あるやろ!! 自分で行けよ!! まあ美女だから  
許すけどな、おっさんだったら握り潰してたわ

長門「いやエヴァお前なら楽に運べるだろ?」

「確かにそうだけど・・・でもなんで」

長門「艦装は知っているか?」

「ああ、お前たちの装備みたいな物だろ?」

知ってるに決まってるだろ、なんせ元提督だからな

長門「燃料が無いんだ・・・」

「あっ(察し) ふくん・・・分かった! 送っていくぜ

丁度俺も行きたかったからな」

長門「ありがとう! 恩に着る!」

「って事は俺たち友達だよな? (暴論)」

長門「ああ!」

信じるの早! もつと疑おうよ・・・心配になるよ・・・

長門「皆もそうだろう?」

皆「はい!」

お前らもかよ・・・大丈夫なのか?・・・

まあ何はともあれ第一目標の艦娘と友達になれたしいいか  
もう知ってるけど名前聞か、会ったばかりの奴に教えても無い  
のに名前呼ばれたら嫌だしな、俺もそのくらい分かってる

「皆の名前は?」

長門「む、自己紹介がまだだったな・・・戦艦『長門』  
だ、よろしく頼むぞ」

大和「戦艦『大和』です! よろしくお願いします!」

赤城「航空母艦『赤城』です、よろしくお願いしますね」

加賀「航空母艦『加賀』よ、よろしく頼むわ」

北上「私は『北上』、よろしく!」

大井「重雷装艦『大井』です、よろしく頼みますね?」

「おう! さあ自己紹介も済んだし行こうか!」

長門「うむ！」

「それでだ長門、聞きたいことがあるんだが・・・」

長門「何だ？」

「何処に行けばいいんだ？」

長門・大和・赤城・加賀・北上・大井「ズコーツ

長門「今さつき言っただろう!?何故分からない」

「?そんな事言ってたか?だがこの雰囲気俺が悪いな・・・こう  
なったら手は一つ!

「すいませんでしたあー!ー!ー!!」

## 第四話 横須賀へGO!!

―加賀視点―

いきなり現れたエヴァさんと言う方に横須賀鎮守府まで送ってもらおう事になった。正直、素性が分からないため多少怖いけれど

妖精さんが従っているので心配ないでしょう  
今は真夜中なので明日の朝行くと決まった

「ホヨちゃんさん」

ホヨちゃん「さんは付けなくていいよ」

「ではホヨちゃん、エヴァさんは一体何なんですか？」

素直な質問だ、深海棲艦を沈めれたこともあるが、何よりデカいデカすぎる

私達など簡単に踏みつぶせる程に

ちなみにそのエヴァさんはこの島の周りの海を見回っている

ホヨちゃん「えー…でも」

赤城「私も気になります」

大和「聞かせてください」

長門「悪い人でないのは分かっているが」

北上「話し方優しかったしね」

大井「でも…」

ホヨちゃん「OK!!じゃあ話すぜ」

「いいんですか？」

後から怒られたりしないだろうか

ホヨちゃん「別にいいですよ、あっちゃん優しいし」

ホヨちゃん「あっちゃんはね、信じられないかもしれないけど  
半分人間で半分機械なんだ」

艦娘 s 「…えっ?」

赤城「それって私達みたいに兵器を使えるようになってる  
ってことですか？」

ホヨちゃん「いや艦娘とはちがう、あっちゃんは体の構造そのも

の

が半分人間で半分機械なんだ」

ホヨちゃん「しかも体が何でできてるかも分からなかった」

北上「あの虹色のバリア？みたいなのは何なの？」

「ちようど私も気になってたのよ」

ホヨちゃん「あー、あれ？あっちちゃんによるとATふいーると  
？っという

まあ、要するにバリアだね」

「本当？」

話が飛躍しすぎてついていけない

ホヨちゃん「本当本当、近くでみたもん、因みにただの兵器じゃ  
ホコリ一つもつけられないよ」

長門「じゃあ…か、核は？」

長門さんが声を震わせながら聞いている

すごく怖いはずなのに

ホヨちゃん「多分効かない、たとえ効いてもすこしケガするだけ」

長門「そ、そうか」

そうして他にいろいろ聞いて私達は眠りについた

|| || || ||

エヴァ「おーい！朝だぞー!!」

エヴァさんの呼び声がする、そうだエヴァさんに送って  
もらう事になってたんだ

エヴァ「皆、起きたな？それじゃメシにすつか！」

赤城「メシって、ご飯の事ですか？」

エヴァ「それ以外になにがある？ホヨちゃん！持ってきてくれ  
！」

ホヨちゃん「ほいほーい」

ホヨちゃんが私達の前に皿を並べ始める、そして最後に  
フタの付いたでかい皿が置かれる

「これは何です？」

ホヨちゃん「おかずだよ、皆で分け合って食べてね」  
そういつてホヨちゃんがフタを開ける、そこには

艦娘、s「お……『お肉』!？」

そこにあつたのは『お肉』だった

今の日本では見ることさえ叶わない幻の食材

国の偉い人でさえ食べたことのない私達の知らない食材

赤城「た……食べていいんですか？」

エヴァ「?ただの肉だろ?別にいいぞ？」

許可が出たことで

資料でしか見たことのない『お肉』を口に運ぶ

「……おいしい」

食べた瞬間とろけるような食感、少し甘いような

とてもお腹にたまる

……これが『お肉』!!

「……」モグモグ

長門「……」ガツガツ

大和「……」ガツガツ

赤城「……」ガツガツ

北上「……」モグモグ

大井「……」モグモグ

その日私たちは少しの間、国や戦いの事

を忘れて、目の前の『お肉』を必死に食べ続けた

—エヴァ視点—

「旨そうに食べていたな」

ホヨちゃん「うんうん!!」

そういうと長門達は恥ずかしそうに俯く

長門「そ、その……／＼／＼」

「はははっ! いいんだいいんだ」

長門「あ、ああ……」

「おっとー! もう時間だ、俺の手に乗れ」

手を差し出す、その手に長門達が乗る……

おっほ〜美女が俺の手を踏んでいるう〜気持ちええんじや

〜

ホヨちゃん「チクるぞ?」

すいませんでした。

大和「あ、あの…… どうやって行くんですか?」

「ん? 飛んでいくぞ?」

艦娘 s 「え?」

「せーのっ!」

ドウウウウンン!!

艦娘 s 「きやああああああああああああ!!!」

おっほ〜艦娘たちが俺の手の中で悲鳴をあげているう〜

ゾクゾクするんじやあ〜

ホヨちゃん「憲兵に突き出すぞ? お?」

誠に申し訳ありませんでした。

## 第五話 兄弟

―横須賀提督（大谷勝彦）視点―

昨日、やっとの思いで溜めた資材を投入して姫級に勝ったその時は勝ったと言う事で俺も艦娘たちも浮かれていた宴会をしようか迷っていたところに長門たちから無線が入った

『敵に包囲されt... ザーザー』

希望に溢れていた俺達の心はどん底に落とされた

「すまない、武蔵、陸奥」

武蔵「何、心配していない、必ず戻ってくるさ」

陸奥「そうよくそのうちひよっこり...」

ウウウーウーウーウーウーウーウー

突然、鎮守府のサイレンが鳴った

「なんだ!?!」

バァン!!

大淀が慌てた様子で執務室に入ってくる

「何があった!?!」

大淀「哨戒していた艦隊からの無線で謎の巨大物体が接近中とのことです!!」

「艦載機での迎撃は!?!」

大淀「目標が早すぎて追跡が不能とのことです!!」

「クソ！迎え撃つぞ!!武蔵、陸奥頼む!!」

武蔵・陸奥「了解!」

そして執務室がある中央棟から出た直後海を割るほどの衝撃が俺達を襲った

「?... なっ!?!」

水飛沫から出てきたのは巨人だった

エヴァ「あっどうも「撃てえー!!」

エヴァ「フアッ!?!」

艦娘たちの砲撃、雷撃、機銃が謎の巨人に向かっていく

先程、謎の巨人がいた所は爆炎に包まれていた

「やったか!？」

エヴァ「それはフラグと言うモンだ!!」

「傷」一つ付いてないだど!?!クソ!もつと撃て!」

エヴァ「え、ちよ」

武蔵「全艦娘!一斉射!撃てえー!」

キィイイン!

俺達の渾身の一撃は虹色の八角形のバリアによって防がれてい

た

「もうムチャクチャだアーーー!」

長門「提督!攻撃を止めてくれ!」

「おお!長門!生きていたのか!でも何故!？」

長門「理由は後で話す!早く!」

「わ、分かった。撃ち方止め!」

武蔵「いいのか!？」

長門「落ち着け、説明するから」

||  
||

「………… そうだったのか」

エヴァ「もう出てきていいいつすかねー?」ビクビク

大井「あなたはどうせ無事でしよう…」呆れ

「すまない、助けてもらって恩に着る。」

エヴァ「大丈夫、間に合って良かったよ」

「おお、優しそうな雰囲気だな…………」

エヴァ「ああ、それとこれ」ドバー

「え?」

エヴァ「資材が枯渇してんだろ?各資材十万ずつ、お土産さ」

ザワ…ザワ…

「いや… 助けてもらった上にこれまでは」

エヴァ「いいから」

加賀「提督、ここは貰っておいた方がよろしいかと」

「これ程あれば鎮守府全体に補給が行きわたる…」

かさねがさね申し訳ない…… なにか欲しい物とかあるか？」

エヴァ「ああ、そのこと何だが二人で話しがしたい」

「そうか…… 長門、全員で補給して来い」

長門「了解した」

エヴァ「皆行ったか…… それじゃ」

## 第六話 金が欲しい

―加賀視点―

加賀「ふう…」

加賀「満足に補給できるなんていつ振りでしょうか…」  
少なくともここ数年はできていない、満足に補給は初めて着任した時

以来だ。それにエヴァさんの事ですが最初は殺されるかと思いましたが

が案外いい人だったので安心です

人…？まあ…いいでしょう。

駆逐艦の子達も嬉しそうにしています、今まで私達の所為で心配かけてきましたしね

赤城「加賀さん、隣いいですか？」

加賀「いいですよ、赤城さん」

気の所為か赤城さんのやつれた顔も戻っているようだった、その手には大量

の料理がある

赤城「加賀さん食べないんですか？」

加賀「ええ、いきなり重い物を食べるのはちよつと…  
今まであまり食べて来なかったからですかね…」

赤城「まあまあ！段々慣れていけば大丈夫ですよ！」

加賀「ええ、赤城さん、ありがとうございます」

赤城「では、頂きましょうか」

加賀「はい、ではエヴァさんに感謝して…」

赤城&加賀「いただきます」

―30分後―

補給兼昼食を食べ終わり私達は食堂で待っていた、だが提督達は一向に来ない

赤城「もう、そろそろでしようか？」

加賀「多分もう終わってるでしょう」

赤城「皆さーん！提督達の所に戻りますよー！」

艦娘、s「はーいー！」

それから少し歩くと港に着く、まだ提督とエヴァさんは話し合っていた

加賀「何かあったんでしようか？」

赤城「聞いてみましょう……提督」

エヴァ「エロ同人誌は純愛に限る！」

提督「いいや！NTRだ！」

エヴァ「あ、NTRはNG。作者も強すぎるNTR見て鬱になりかけたしな。

「エロは純愛！駆逐艦はかわいい！」

駆逐艦「〃〃〃」

小さな子の前でそんな事を言うのはちよつと……

エヴァさんには感謝しているがこれは見逃せない……

加賀「あの……小さな子の前でそんな事を言うのは止めてください  
い」

エヴァ「小さな子の前でそんな事を言うのは止めてください」(……)

ω・・(キリッ

提督「だーはっはっはっは！ww」

提督「小さな子の前でそんな事を言うのは止めてください」(裏声)

エヴァ&提督「だーはっはっはっは!!ww」

加賀「ギリッ

蒼龍「あーあ、怒らせちゃったー」

飛龍「でもいつも瑞鶴が怒らせてるけどね」

瑞鶴「なッ！あんな事言ってるない／＼」

翔鶴「瑞鶴、多分そういうわけじゃないとおもうけど……」

もう許さない、こうなったら一から教え込みます

提督「あ、やべ、エヴァ！逃げるぞ！」

エヴァ「お、おう！提督！」



## 第七話 普段静かな奴こそ怒らせたら怖い

―加賀視点―

提督「やべえ！逃げるぞ！」

エヴァ「おk！」

加賀「逃がしません」ガシッ

提督「うわっ!?!」

エヴァ「提督!?!」

提督「俺に構うな！先に行け！」

加賀「なんで私が悪者扱いになってるんですか…」

エヴァ「かつちゃん… お前の事は忘れない！」

加賀「逃がしませんよ」

加賀「二航戦、五航戦やりなさい」

蒼龍「は、はい！」はっかん！

飛龍「エヴァさんごめんなさい！」ハツカン！

翔鶴「申し訳ありません！」発艦！

瑞鶴「なんで私ものよ…」Take off!

瑞鶴「つてなんで私だけ英語なのよ!?!」

エヴァ「ヴァ… w w w 俺にタダの艦載機が効くわけねえだろ w

w

うえうえ w w w

艦載機へブーン バツ！

エヴァ「うわあ!?!なんだこのワイヤー!?!」

加賀「深海棲艦鹵獲用のワイヤーです」

赤城「まあ使われなかったんですけどね…」

グラッ…

エヴァ「あつ…」

提督「あつ…」

艦娘's「あつ…」

バッテリー…!!

「エヴァさあーん!?」

提督「捕まったか… 兄弟」

エヴァ「お前もな… 兄弟」

加賀「あなたたちなんでそんなに仲良いんですか… 今日あったばかり  
でしょう」

提督「友情に時間は関係ない!!」

エヴァ「そうだ! そうだ!」

加賀「ともかく提督もエヴァさんも鎮守府ではああいった言動は控えて  
ください」

提督「えー!」

エヴァ「別にいいだろ!」

加賀「分かりましたか?」ゴゴゴゴ

提督&エヴァ「イエスマム」

瑞鶴「そういえば提督さん、大本営にエヴァさんの事言ったの?」

提督「あっ! いっけね! 忘れてた!!」

艦娘 s 「(横須賀の司令官がそれでいいんですか…?)」

|||||

大本営

―元帥視点―

元帥「ふう…」

大和「お茶です」

元帥「ありがとう大和、そこに置いといてくれ」

大和「お悩みですか？」

元帥「ああ、少し考えてた」

大和「例の『黒い巨人』ですか？」

元帥「うむ、最近深海棲艦があまり攻めてこないだろう？」

大和「はい、確か三か月前ぐらいから」

元帥「その時からなんだ『黒い巨人』の目撃情報が相次いだのは。最初は嘘かと

思ったが、色んな場所で目撃されている、信じるしかないだろう」

大和「調査は？」

元帥「もちろんしたさ、でも分かったのは『黒い巨人』の胸の辺りに

赤い球体があるとしたか…」

ダツダツダツ……ボタン!!

元帥「どうした!」

兵士「横須賀より電報!謎の巨人を捕獲したとの事です!」

大和「!!」

元帥「(横須賀……息子が指揮を執っている所か……)信頼性は?」

兵士「高い……です」

元帥「至急横須賀まで移動するぞ!!」

兵士「はっ!!」

元帥「大和も来るか?」

大和「はい!!」

元帥「(捕まえたという巨人…… 噂の『黒い巨人』だろうか……)」

## 第八話 紫の巨人

元帥たちが乗った車は急ぎ横須賀へと向かっていて、その車内では大和がやけにニヤニヤしている

元帥「ご機嫌だな？何かあったのか？」

大和「あそこの景色は絶景ですから」

元帥「楽しそうだな」

大・大和「ふふ」

しばらくして元帥たちの乗った車はトンネルを出る、目の前には横須賀の大海原が広がっている

大・大和「わあー！いつ来てもすごいですね！」

元帥「うむ、海に反射した光が眩いぐらいだ、今この国が資源難だとは思えない程に」

大・大和「でも捕獲した巨人とは何処にいるのでしょうか？」

元帥「分からないが、おそらくドックに隠しているのだろう、巨人が居たとなれば大騒ぎだ」

|| || ||

運転手「着きました」

元帥「うむ、ご苦労」

大和「お疲れ様です！」

バタン・・・ブウウン

提督「元帥に敬礼！」（〃、・ω・）

艦娘's「！」（〃、・ω・）

元帥「うむ」

大和「こんにはは！」

提督「こんにちは！・・・ほんで親父、何の用で来たんだ？」

元帥「勝彦・・・今は公務中だぞ・・・」

提督「良いだろ別に、で？」

元帥「例の巨人を見に来た」

提督「巨人？・・・ああ、エヴァの事か！」

元帥「エヴァ？」

提督「こつちだ」

大和「母港では無いのですか？」

提督「まさか、入らないよ」

\*\*\*

提督「おーい！エヴァ！もう良いぞ！」

お！合図が出たな……

元帥「さて……鬼が出るか蛇が出るか……」

ゴゴゴゴゴゴ

元帥「な……」

大和「嘘……」

バシヤア!!

エヴァ「ドーモ、元帥〓サン。」

大和「」

元帥「こりや、たまげた……まさか本当だったとは……」

提督「な？言った通りだろ？」

大和「思ってもみませんでした……」

元帥「うむ……君の名前は？」

エヴァ「エヴァンゲリオンと申します……あ、エヴァで良いっすよ」

元帥「では、単刀直入に聞くぞエヴァ君」

エヴァ「何すか？」

元帥「君は我々と争うつもりなのかね？」

言うと思ったよ……こんな姿だから当たり前前だけど

エヴァ「そんなことする訳ないじゃないですか！」

大和「ふう……」

元帥「良かった……」

エヴァ「俺も艦娘の皆と一緒に戦ってもいいですか？」

大和「その申し出はありがたいのですが……」

元帥「我が国には資源が無くてな、君のような巨体を動かす燃料は…。」

提督「何言つてんだ親父」

エヴァ「俺には燃料も弾薬も必要ありませんよ?」

大和「ほ、本当ですか!？」

エヴァ「そうだよ」

元帥「すごい!これは大きな戦力になる!制海権奪還も出来るかも知れない!これは戻って会議をせねば…。」

キイロー!!

バタン!!

兵士「元帥殿!元帥殿はいらっしやいますか!？」

元帥「どうした!？」

兵士「呉鎮守府が謎の巨人に襲撃されていると電報が!！」

元帥「なに!？」



日向「提督！危ない！」  
ドゴオオオン!!

クソ…… 工廠がボロボロじゃねえか早めに屋外に退避して助  
かったぜ、艦娘達は寮に居たから良かったがこりやこの鎮守府もダメ  
だな

呉提督「こうなりや、本土に被害が及ばないようにここで食い止める  
か」

日向「最初からそのつもりだ」

呉提督「見たところあの赤い球体が弱点だあそこを——」

バシヤアアアアン!!

呉提督「今度は何なんだよ!!!」

日向「もう一人の巨人!」

呉提督「何だ!? あいつも敵なのか!」

バタン!!

提督「大丈夫か!」

元帥「大丈夫か!」

呉提督「横須賀の奴に元帥!」

提督「助けに来た!」

呉提督「でもあの巨人が!」

元帥「大丈夫だ! エヴァ君が何とかしてくれる!」

呉提督「エヴァ?」

|||||

くエヴァ視点く

エヴァ「……」

薄々気づいてたけど、まさかサキエルが居るなんて…… 俺に勝て  
るか? …… いや勝つんだ俺以外に使徒は倒せない

サキエル「…」  
エヴァ「行くぞ！」

よし、まずはサキエルの顔面に右フックをくらわ  
バキイ！

エヴァ「ぐふっ!？」

加賀『エヴァさん!？』

エヴァ「ゴホツ… 俺は大丈夫だ、加賀さん達は呉の子達を護つて  
てくれ」

加賀『気を付けて下さいね』

エヴァ「分かっていますよッ！オラア！」

キイイイン！

エヴァ「ATフィールドか… じゃあこっちm」

長門『エヴァさん！足元に逃げ遅れた子が！』

陸奥『危ない!』

エヴァ「ううえ!？」

フワツ…

エヴァ「あっ…」

バシヤアーン！

ヤバイヤバイヤバイ！早く立て直さないとあの二の舞に…！

ガシッ

ギチギチギチ…

エヴァ「ぐあああ！腕が！」

ボキッ!!!

エヴァ「かッ…！」

加賀『エヴァさん!？』

|||||



## 第十話 知らない世界、知らない空

くエヴァ視点く

『エヴァさん！避けて！』

「うわあ！」

目を開けるとそこは舞鶴鎮守府、どうやら気を失ってたらしい

「俺は勝てたのか？」

周りを見る、舞鶴は消滅していない、俺は皆を護れたのと自分が生きてる事で安堵する、しかし、ここにも使徒が居るとは思わなかった、これは考えを改めなくてはいけないかもしれない

「良かった、皆を護れた……」

と、右目に違和感を覚える

「なんだこれ……チューブ？」

右目周りになんらかの小さなチューブがあった、チューブの中には緑色の液体が流れており俺に液体を送っていたのだろう

「エヴァさん!?目を覚ましたの!?!」

ボーツとしていると加賀さんが走り寄って来た、可愛い。

「どうしたんですか？」

「エヴァさん全く目を覚まさなかったから！みんなも心配していたのよー！」

涙目で加賀さんが訴えてくる

「ご、ごめん。あの……ここは」

「舞鶴よ、ここに来た横須賀の艦娘の大半は横須賀に帰ったけど一部の艦娘はここに残って舞鶴の復興をしているわ」

「加賀さん……俺は勝てたんですか？」

念のためもう一度聞いてみる事にし、加賀さんに言う

「ええ、貴方はあの巨人を倒して、私達を護ってくれた……」

「やっぱり……本当に良かった」





くエヴァ視点く

エヴァ「そんなことが・・・」

とか言ってるけどまんま原作やないかい!!

加賀「その後、私達が一斉に介抱したのよ」

エヴァ「このチューブも？」

俺の手には緑色の液体が流れてるチューブがある

加賀「そ、艦娘用の高速修復剤よ」

加賀さんが微笑みながら教えてくれる、やはり可愛い（\*≧≦\*）

エヴァ「あはは、そういえばどのくらい寝てたんです？」

どうせ3日が2日ぐらいだろ、そのくらいあればシヤムシエルまでの準備はoooooooooooo

加賀「二週間よ？」

エヴァ「はあッ!？」

サキエルのあとにシヤムシエルが来るのが確か三週間だったはず

!じゃあもう一週間しかない!?

加賀「どうしたの？」

エヴァ「加賀さん!!早く元帥の所へ連れて行ってくれ!!」

このままじゃ沢山の人が死んでしまう、いくら俺がエヴァだからって確実に護れるかわからない

加賀「! わかったわ!」